

科目	小児看護学方法論 2 本試験問題・解答用紙	学籍番号		
講師名	中原 久美子	試験日	令和 7 年 10 月 6 日	(月)

問 1.以下の文を読み正しい文には○、間違っている文には×を () 内に記入してください

【機嫌・不機嫌】

- ① (○) 新生児期の啼泣は、生理的欲求を訴えることが多い
- ② (×) 機嫌についての観察の視点要素には、性格は関係ない
- ③ (○) 啼泣とは大切な表現の手段であり意志を伝える手段でもある
- ④ (○) 子どもの観察では、年齢や月齢、疾患や障害によっておこりえる影響を捉えることが大切である
- ⑤ (×) 不機嫌の観察では、母親の感覚は考慮せず看護師の視点のみで判断をする

【嘔吐・下痢】

- ⑥ (×) 反射性嘔吐は、迷走神経や副交感神経を得て間接的に刺激されることでおこる
- ⑦ (○) 新生児期、乳児期の嘔吐の原因要素には、腸重積など母体内での身体形成の段階での異常がある
- ⑧ (×) 嘔吐症状がある場合は、仰臥位保持が望ましい
- ⑨ (×) 嘔吐症状のある子どもは、絶対絶食とする
- ⑩ (○) 嘔吐時の制吐剤として、メトクロプラミドやドンペリドンが処方されることが多い
- ⑪ (○) 小児は、気候の変化などの影響を受けて自律神経のバランスが崩れて下痢が起こりやすい
- ⑫ (×) 下痢症状がある子どもの観察視点では、地域や学校での感染症の流行の有無は含まれない
- ⑬ (○) 下痢は、ストレスや不安などの精神的影響をうけることがある
- ⑭ (×) 子どもの脱水は、低張性脱水が多い
- ⑮ (×) 乳児期の軽度脱水は、体重減少が5%未満である

【発熱・痙攣】

- ⑯ (×) 子どもは、筋肉の震えによる熱の生産が盛んであるため発熱が起こりやすい
- ⑰ (○) うつ熱は、体熱の生産と放散のバランスが安定したときにおこりやすい
- ⑱ (○) てんかんとは大脳皮質ニューロンの過剰興奮によって、起こる発作性症状を繰り返す慢性疾患である
- ⑲ (×) 乳幼児は体重当たりの体内水分量の割合が60%と成人より多く、水の電気触媒としての影響が大きく、全身に異常な放電が広がりやすいため痙攣が起こりやすい
- ⑳ (×) 意識が消失し身体、または一部の筋肉が急に脱力し、姿勢が崩れる発作を脱力発作は乳児期の多い痙攣発作である
- ㉑ (×) 痙攣症状がある8歳の子どもへの服薬指導として、症状がない場合は飲まなくてもよいと伝える

【疼痛】

- ㉒ (○) 痛みは主観的な感覚であり、個人差がある
- ㉓ (×) 2歳の子どもの痛みを評価する場合は、フェイススケールを用いて行う
- ㉔ (×) 10歳は、痛みと病気やケガを関連させて考え理解することができる
- ㉕ (○) 4歳児の痛みは、自分への罰として捉えることがあるため注意が必要である

40

-4

-2

-4